



TITLE:

<批評・紹介>陳夢家著 高禰郊社祖  
廟通考

AUTHOR(S):

内藤, 戊申

---

CITATION:

内藤, 戊申. <批評・紹介>陳夢家著 高禰郊社祖廟通考. 東洋史研究 1937,  
3(1): 72-75

ISSUE DATE:

1937-10-21

URL:

<https://doi.org/10.14989/145586>

RIGHT:

さて上掲の文中に「其上衡書貫例云云」とあるのを師は直ちに新出土のその關外に太く<sup>三</sup>と書かれてゐる三字を指したものと謂つてゐるが、この文章はすぐ續いて「左曰某字料。右曰某字號」とあるによつても知られる通り全く關内の上半部に就いて記したもので關外のそれを謂つたのではなく、且つ文字そのものも横書きではない。これは恐らく、三朝鈔幣圖錄所載興定寶泉の關内上段に「貳貫聞省」と大きく横書してゐるのと同じ様式を指すのであらう。従つて今挿入の寫眞にみるが如き、新出土銅版の關内上段中央に「壹伯貫八十足陌」と縦書きされてゐるのは金史に謂ふ衡書貫例とは書法を異にして居り、師の比定は當らない。師は又新出鈔版の關内下段四行目にみえる「覆點勘訖都目」を全部官名と考へてゐるが、これは覆點勘訖都目押字とよむべきで、惟ふに師は前引金史の「付戸部覆點勘令史姓名押字」とあるのを戸部覆點勘令史と謂ふ官名の如く誤解した爲に外ならず、従つてかかる誤解の基をなした興定寶泉の戸部勘合令史押字（三朝鈔幣圖錄參照）の文字も戸部勘合令史押字なる官名にあらずして戸部勘合令史押字と讀まれねば

ならない。猶又論題には「1211年の鈔版」とあるも、貞祐二年は一二一五年に相當すれば「1215年の鈔版」と訂正すべきである。とまれ假令、上述した如き一二の瑕瑾は存しようとも、本論文が金代經濟史研究の上に一の重要根本の資料を提供した點に對しては吾等は齊しく深甚の感謝を致さねばならない。

この外、本號には、Jennes, Prof. Dr. Jos., L'art chrétien en Chine au début du XVIII<sup>e</sup> siècle. Eikes, Eduard, Ist die Hsia-Dynastie geschichtlich? Hagenauer, Charles, Du caractère de la représentation de la mort dans le japon antique. の三篇が掲載されてゐるが紙數の都合もあればこれらの紹介は割愛する。 (田村實造)

陳夢家著

### 高禰郊社祖廟通考

清華學報第十二卷第三期 四四五—四七二頁

一昨年本誌第一卷第二號に於て先輩小川茂樹學士は清華學報所載の聞一多氏の「高唐神女傳說之分析」なる論文を紹介された。聞氏の論文は、文選に收められ

て居る宋玉の高唐賦に見える高唐神女なる者は、高唐賦に於ては未だ嫁せずして私奔せる淫女といふことになつて居るが、本來は民族の共同の遠祖である所の原始母神であることを説かんとするものである。支那の民族の多くはその族祖として女神を考へて居る。そしてこの女神は天帝の配遇者として風雨を司るものと考へられ、従つて虹を以てこの女神の象徴とする考へも生じて来る。所が一方仲春の男女の會合を司る高禰神なるものがあるが、聞氏は族祖であり、風雨の神である女神と高禰神とが同一のものであると主張するのである。

こゝに紹介しやうといふ陳夢家氏の論文は、いはゞ聞氏の後を承けて此と同じ問題をより一步進めて、高禰、郊社、祖廟は皆その源を一にするといふ所まで説かうといふのである。本論文の支那古代史に於ける意義といつた様なことに就てはこの論文の終りに附した聞一多氏の跋に詳しい。今その要旨を左に擧げる。

此の問題は郭沫若の「釋祖妣」なる研究に端を發し、自分が之に繼いで「高唐神女傳說之分析」を發表し、更に孫作雲が「九歌山鬼考」及「中國古代之

靈石崇拜」を著し、最後に陳夢家が出したのが本論文である。

自分の考へでは支那の古代文化史は「社」を以て核心としてゐる。古代の人間の生活上最重要事である求子、求雨の二事も矢張りこの社に關係して居る。陳夢家の此の一文は社の制度研究上大なる意義を持つて居る。云々

私自身は此の問題を特に研究したわけではないので、今此論文に對して批評めいた事柄を述べる餘裕がない。論據や結論の是非には觸れず、單に論文の梗概を掲げて紹介の責をふさぐに止めて置くことにしたい。

本論文は六節から成る本文と附記、附録一、二、及び校後補録とを含んで居る。以下節を逐ふて内容の概要を擧げる。

(一) 釋高唐賦——說瑤姬爲私奔之佚女 先づ文選の宋玉の高唐賦の諸本によつて五校した本文を掲げ、本文中の瑤姬とは未婚にして私奔せる淫女であるとし、此の女と楚王との交會は即ち男女が會合する高禰の祭に際して行はれたものであると解する。次に高唐は高

丘、高陵、高陂、陽臺等々同一のものであり、且爾雜に「山の堂の如き者は密なり」とある如く高堂(唐)は即ち高密である。高密は聞一多先生も謂ふ如く高祿の轉音である。結局高唐は即ち高祿であるといふことになる。古代に於ては高祿の祭も雨を求める祭も皆山で行はれたものである所から高祿を靈雨に託喻する様なつたのだらう。

(二) 釋高密——說高祿之制 聞一多先生によれば「夏殷周三代皆先妣(遠祖の女子)を以て高祿(子を求める神)として居る。夏ではそれは塗山氏であり殷は簡狄周は姜源である」と。これは先妣を以て高祿の神とする説であるが、併し高祿は高密の轉音で、元來高丘密庄にして人々が野合した場所を指す語である。それが後に其の場所を尊んで神宮とする様になり、更に降つては土を積んで之を象る様になつたのである。臺とか觀とか館とか宮とかいふ名前が即ちかゝる人が作つた所の神域を指すわけである。

密の字は元來山の形を形容する普通名詞であつたが後固有名詞になつた。左傳や漢書地理志に見える、密の字の附いた地名のある國は齊魯莒鄭都の五國であ

る。この中齊の高密、下密、都の商密は皆高祿である。尙この他楚、秦にも高祿があつたと思はれる。

又一方高祿を三戸、三石、三戸郭、三戸城といふのは山で三面が圍まれて一方だけ開いた様な場所を指すもので、初め民がその隱秘なる地形を利用して交會を行つた場所を後に之を尊んで神域とし、且祖先の遺制を遵つてこゝを野合の場所としたものである。更に後世祖先と天帝とを混淆して高祿は上帝であるとして了つたのである。

(三) 高祿郊社與祖廟爲一 上述の如く高祿は祖妣發祥の地であるから、即ち高祿は最古の宗廟を祀つたものであるわけである。然らば所謂宗廟と高祿・郊社(天地を祀る所)とは同源にして分化せるものと考へるこゝとが出来る。(陳氏はこの事を古文や甲骨文の上から例證してゐるがこゝには省略する)

(四) 楚之高祿——說屈原三閭大夫爲媒巫 文選高唐賦に見える楚の雲夢なるものは乃ち楚の社のある所であり又高唐なる字は高祿・郊社の音が變じたものである事は郭沫若先生が既に謂はれた。又郊社は即ち高祿であることは聞一多先生が證明された。自分の考へでは

都の商密は楚の都した地であつて、其地に三戸山なるものがあるが、之は高禪の處である。又三戸の地は楚人の開國發祥の地であるからそこには先王の遺廟があつたであらう。

屈原は丹析・三戸の邊の地に居つて、三閭大夫と爲つてゐたものである。案するに三閭は三戸である。三戸は高禪の所である。然らば三閭大夫即ち三戸大夫なる者は男女の高禪を司つた者、乃ち古の媒巫に當るものであつたであらう。即ち屈原は媒巫であつたのであらう。

古代の巫官は能く歌ひ舞つた。その歌の文句には雨を求むる言葉や、本族の起源・神話及歴史等があつて之を歌つて傳へたものである。楚辭の離騷の内容は三代の事が述べてあり、天問は古代の神話であつて即ち巫官の仕事に相當してゐる。よつて之を巫官である屈原に附託したものであらう。

以上の四節で陳夢家氏の重要な論旨は大體言ひ盡してゐると信ずる。後の二節の一つは齊燕鄭衛秦等の諸國にも高禪があつたことを説かんとし、一つは高禪は古く商に始まつてゐることを説いてゐるが、論證が

前四節に比して稍々お粗末でもあり、著者も餘り力を入れてゐると思へないので省略して置く。

尙聞一多氏はその跋に於て次の様な事を言つて居る。楚辭の離騷の思想は先秦學派中の神仙家に屬するものである。自分がかねて離騷の作者は巫官であり、神仙家であることは確かだが、屈原が巫官であり、神仙家であるかどうかに関しては疑を持つてゐた。所が今陳夢家が屈原が巫官であることを別の方面から證明したのでこの疑問は解決した。従つて所謂屈宋學派の思想の來源も明になり、延いては鄒衍・莊周以下漢の時代の黃老學派の成立過程も大に明になつて來たわけである。云々

(内藤戊申)

〔附記〕 陳夢家氏は浙江上虞の人、國立中央大學法律學士及び燕京大學文學碩士、現に青島大學助教、年少氣銳の學者である。金文甲骨文を研究し、佳夷考馬貢五卷十期、令彝新釋考古史字新釋五期等の論文があり、特に甲骨文の民族學的な解釋を試み、祖廟與神主之起原文學報第三期、古文字中之商周祭祀燕京學報第十九期、商代的神話與巫術同上第二期の力作を著した。特に最後の論文の下篇は巫術の研究を專論してゐる。本論文の讀者は更に之に就いて見られたい。